



「天狗と赤鬼のからかい」：「鬼祭」パンフレットより
天狗の持ち物は、薙刀^{なぎなた}。赤鬼は、撞木^{しゅもく}（元来は二又の木）。

田楽①『鬼祭』

祭が終わると春が来るといわれる安久美神戸神明社の「鬼祭」。天下の奇祭^{きさい}として名高い。

千年の時を刻んで

祭の始まりは、平安時代。昭和55年、国の重要無形民俗文化財の指定を受けた。「天狗と赤鬼のからかい」で有名だが、根底に『田楽』がある。

鼻高（天狗）の創生 天狗 vs 赤鬼のからかいはいつからか

「鬼祭」は、もともとは年の初め、1月13・14日に農作物の豊作を予祝する祭であった。安久美神戸神明社に伝わる古面「赤鬼面」「鼻高（天狗）面」は、当時東三河を治めていた今川義元が寄進したという。

鼻高（天狗）を創生したのは狩野派の重鎮狩野元信（1476～1559年）。故に1550年ごろには、田楽演目「赤鬼と鼻高（天狗）のからかい」が、飽海^{あくみ}の農民によって始められたと伝えられている。

逃げる赤鬼」追儼^{ついな}の鬼」から

鼻高（天狗）とからかいに敗れ、逃げる赤鬼は、修正会^{しゅじょうえ}の追儼行事が色濃く残っている。

また、退散時に、タンキリ飴や粉をまく。タンキリ飴を食べ、粉を浴びると夏病みしない・厄除け効果があるという。赤鬼は、追儼の悪霊の「疫鬼」と除禍招福をもたらす「祖霊」の二面性をもった鬼といえる。



「青鬼」 青鬼・岩戸の舞記念誌編集委員会『青鬼・岩戸の舞 36年のあゆみ』豊橋鬼祭・青鬼保存会刊昭和、子鬼「青鬼」誕生由来を記載。

タンキリ飴や粉 隠された意味

タンキリは米を石臼^{いしうす}形の石で粉にし、水でねり乾かしたものである。「石臼」は「女性」を表わし、「豊穰のしるし」である。

鬼祭は田楽の一種だが、田遊び系の芸能は含まれていない。しかし、天狗の方固め・田楽^{おどり}躍・司天師の八足とびなど、悪霊ねじふせの術がみられる。徳川家康は竹千代時代に鬼祭を見学。司天師の八足とびに興味を示した逸話が残っている。

田楽②隠された意味

かつては、生きること＝食べることであった。特に山岳地の人々にとって不作・飢饉は「死」を意味していた。

田楽の所作や持ち物には、収穫の意味が込められている。

雪祭・^{さいほう}幸法



「競馬」：豊作を願いの的に当てる 伊東直幸氏撮影



新野『雪祭』の「さいほう」 伊東直幸氏提供

「さいほう」が頭にかぶっている冠は、稲わらで編んである。先端の袋に入っているのは「五穀の種」。「さいほう」の持ち物や舞は、全て豊作につながる。

腰に挿している「ホッチョウ」は、「子孫繁栄」のしるし。子供の誕生と作物の実りをかけている。舞の途中の行動は、人々の笑いを誘い、子宝の願いをかなえるという。

水の予祝・雨乞い

稲の生長に水は欠かせない。雨乞いの予祝が見られる。

収穫の喜びと腹いっぱいのご飯を食べられる幸せを表現した「高盛り飯」。高く高く、椀にご飯が盛られる。ご飯に汁をかけて食べるのは、「雨乞い」のしるし。漁師や船頭は雨を嫌い、決して汁かけ飯を食べなかったという。

浜松市北区滝沢の田楽『シート一祭』、「シート一」の言葉の中に「湿り気・雨」をこめている。

全ては、稲の生長と豊かな実りのためである。

豊作と笑い 招福の願い

「おぶっこさま」と呼ばれる赤ん坊を背負い、食事を与える。子供の成長と稲の生長を重ね豊作を祝う。田楽の動作はほのぼのとして笑いを誘う。「笑い」は、「福が来る」の予祝である。田楽の持つ滑稽さの根底に、生活の向上と笑いで幸を呼びこむ願いがこめられている。

五穀豊穰・子孫繁栄・無病息災・長寿延命は、いつの世でも人々が持つ願いである。



懐山『おくない』・「駒の舞」
切絵上嶋裕志氏制作



『遠州のひよんどりとおくない写真展案内』
鈴木一記氏撮影・制作